

幕末・明治前期、圓珠院貫忠と地域の民衆・名望家

— 徳川系紀州天台寺院の近代化 —

藤 本 清二郎

はじめに

愛宕社・圓珠院は、近世の和歌山城と城下町和歌山の南方郊外、同時に近世村和歌浦（Ⅰ和歌村）領の北端に位置する^①。この寺社に関する研究は、境内石造物調査を除いてほぼ皆無であるが、二〇一九年庫裏等の建替計画に関わって、建造物、古文書、仏像・絵画等美術品の調査が同年から二〇二〇年にかけて急ぎ行われた。本稿で使用する史料は、とくに断らない限り今回発見された史料である（元の保管場所「棚」・「蔵」の区別と整理番号を示す）。

圓珠院は近世紀伊徳川家と深く関わる天台寺院であるが、最近の調査された古文書の検討から、近世前期における京都愛宕社との関係や近世後期の寺院経営の具体相などが解明され、従来の頼宣・重倫・治宝等の藩主の支援というイメージだけでなく、圓珠院の固有の経営基盤、変容過程が具体化されつつあり、『南紀徳川史』の解説を乗り越えてゆく動向が生じている^③。本稿では、その調査で発見された諸史料と境内石造物の再調査等の成果を活用し、

幕末期から明治末期まで住職を勤めた第一三代貫忠に焦点を当て、江戸期以来の民衆的な信仰、支持基盤を持ちつつも、領主制の廃棄の中で経済基盤が名望家層に移行して行く過程、つまり徳川系寺院からの脱皮、近代化を解明する。

明治前期における地域社会の動向を理解するため、「名望家」に注目する必要があることは近代史の常識であり、これまで近代行政との関係に焦点が当てられてきた。地方都市の寺院や信仰・文化に目配りする必要があるのではないかと思われ、本稿はその論点を検討する研究ノートである⁴。

【一】圓珠院の代々住僧と第一三代貫忠

はじめに江戸期の代々の住僧の名前と没年、関連事項を表に示す。第1表は天保一二年(一八四二)の圓珠院の記録と墓石の刻印文字から作成したものである⁵。

江戸期の愛宕社・圓珠院は景観の観点から、創設期(初代藩主頼宣代)、再建期(六代宗直代)、拡充期(八代重倫代)とおおむね区分されるが、それぞれ時代の住職は、顕栄・亮厳・貫珠であり、幕末明治期の住職は貫忠であった。なお墓石(顕彰碑)には顕栄は二世とある。ここでは混乱を避けるため、後に通用する代数を使用する。

江戸期、圓珠院は一三代の僧が住職を勤めたが、三代目亮海・八代目慧厳・九代目貫珠・一三代目貫忠の在職が長い。六代目光憲・七代目亮厳・一二代目貫光も短いということではない。一八世紀初めや一九世紀初め頃はやや短く、この時期を除いて、江戸期を通してある程度安定した寺院経営が行われていた証拠であろう。ちなみに、七代目・八代目の僧名は同じ「厳」を使用し、九代目以降は頭に「貫」の文字を付けている。いわば子弟を含む法縁による継承があるようである⁷。九代目貫珠は雲蓋院貫春の弟子で、佐渡国相川出身者が法縁で圓珠院に来た。さら

第1表 江戸・明治期の円珠院厩代住職

代	法名	没年	西暦	月	日	在職年数	備考、院号等	墓石
開山	顕榮	慶安3	1650	4	25		墓碑には二代目	○
2	榮願	寛文4	1664	6	10	14		
3	亮海	元禄10	1697	3	23	33	雲蓋院へ転出か	
4	清顕	元禄13	1700	7	4	3		
5	豪詮	元禄15	1702	8	13	2		○
6	光憲	享保9	1724	4	8	22		
7	亮巖	延享元	1744	正	朔	20		○
8	慧巖	安永4	1775	9	16	29	戒定院	○
9	貫珠	文化8	1811	2	21	36	珠王院、順道、貫春弟子、生国佐州相川松永氏二男	○
10	貫鎮	文政6	1823	12	17	12	(俗姓寒川弥五太夫男)	○
11	貫瑞	天保6	1835	5	28	12	俗姓藤本伴次郎三男	○
12	貫光	安政元	1854	11	8	19	真乘院、生国佐州相川四丁目衣笠氏二男	○
13	貫忠	大正2	1913	4	18	59	高照房、一雨院	○

〔代々書上〕(棚58—11)、墓石から作成

家寄留とした。このように後に圓珠院に戸籍地を復したが、弟子入りに際して、岡本重太郎の斡旋など関与があったのかわからない。なお、岡本重太郎は明治期に士族と記されているが、江戸期の岡本重太郎は西浜村居住の、西浜「御殿御部屋様」(側室附)の「伊賀役」であった。^①

に二代目貫光も佐渡国相川の出身で、地縁(同郷)による抜擢(推薦)があったと見られる。九一三代目はいずれも在家出身で、寺院の子息が継承することはなかった。江戸期一三代は妻帯せず、血縁による寺相続は無いと判断される。

本稿で検討対象とする一三代貫忠は、文政二年(一八二八)三月二日生まれで、(堀田)幸右衛門五男で、天保九年(一八三八)一歳の時、圓珠院貫光の弟子となった。^② ついで、明治八年(一八七五)に貫忠は「西浜村百十八番地士族岡本重太郎方江同居、本籍相定置候処、勝手都合二付、当村九番地之内江本籍相定申度奉存候」と復籍願を提出している。^③ 「当村」は和歌村で、九番地は圓珠院の地番である。すなわち、貫忠はもと岡本重太郎方に寄留しており、その後明治八年に本籍を圓珠院に定めた。明治初期、戸籍作成時に貫忠は、(明治初期の神仏分離へ対応であろうか)戸籍は圓珠院を避け、いったん岡本

第1表2 住職以外の墓石僧名

番号	尊号	僧名	没年	西暦	備考
1	法印	徳順	寛永13	1636	
2	大法師	泉識	寛永17	1640	
3		廣海	元禄4	1691	正光院
4	沙弥	真海	天明8	1788	九世貫珠俗兄、和歌宝蔵院第十世
5	大徳	貫浄	文政2	1819	十世貫鎮弟、俗世寒川弥五太夫二男
6	法印	貫純	?		貫鎮法弟
7		鎮修	?		貫鎮弟子
8	大徳	泰尊	文政11	1828	
9	権律師	實真	天保7	1833	
10	二薦法印	貫仲	安政6	1859	九世貫珠末弟
11	大和尚	恵澄	文久2	1862	粉河十禅院輪番(棚58—14)
12	権律師	貫恕	明治31	1898	一妙房(貫忠妻)

*墓石より作成

遡って、貫忠が圓珠院住職となるのは二七歳の時、幕末期の安政元年(一八五四)で、死去するのは大正二年(一九一三)である。在職期間は五九年と、他の先住職に比べて極めて長いことになる。長命(八五歳)であったことによるが、貫忠は江戸時代と明治近代を生き延びたことになる。近代への移行期、時代が大きく変わる時期に住職を勤め、近世徳川寺院の近代化、民衆化を成し遂げた。ここに特徴がある。それは僧侶人生の一生を要した一大事業であった。貫忠は、日本の近代化、地域社会の近代化に天台寺院僧侶として関わった人物であることが注目され、同時に、貫忠の人生、事績から地域社会の変化を見ることも可能であろう。

次に、圓珠院の代々住職の「縁」(出自的人的環境)を概観することによって、貫忠の人的系譜の特徴を検討しておく。圓珠院境内には、代々住職の墓石の他、圓珠院住職ではない僧の墓石もある。第1表2のように一二人の僧名と没年が分かる。古い時代の1〜3は除き、備考に記した関連情報が少し知られる。墓石の記事からは、まず墓石の僧と圓珠院住職との血縁関係が見られることが注目される。4真海は和歌浦宝蔵院住職で、圓珠院第九代貫珠の実の兄であった(何故宝蔵院に墓石が無いのかは不詳)。実

の兄弟が和歌浦雲蓋院末寺中の住職を分担した⁽¹⁹⁾。また5貫浄は圓珠院第一〇代貫鎮の俗「弟」であった。兄弟で圓珠院に務め、弟は住職と成らず、圓珠院に葬られたのであろう。同じく10貫仲は第九代貫珠の血縁末弟であった。

墓石の僧と圓珠院住職との間に法縁の子弟関係も見られる。6 貫純・7 鎮修は圓珠院第一〇代貫鎮の「法第」⁴⁸と記されている。11 惠澄は粉河十禅院（現十禅律院）に所属するが、江戸東叡山寛永寺輪番を務め、江戸で就業中に没したと記されている。圓珠院に墓石（供養塔）が建てられたのは、学僧に対する敬意と天保期、圓珠院の財政改革（東叡山預金「府庫」）に貢献した功によると推測される。

ついで12 貫恕についてみておく。この時期の「日次記」（棚58¹³）は正確には、明治一九年（一八八六）「日並雜誌 貫恕」、明治二二年「日並雜誌 恕庵秘記」とあり、両筆跡は一致する。つまり12 貫恕≡恕庵であるが、明治三一年に没している。貫恕筆「日次記」は明治三一年でおわり、三二年は別筆（おそらく貫忠自身）である。墓石にある権律師という僧の称号の格は低く、僧正・僧都の下に位置し、権は副官をさし律師は僧尼を統轄する僧位である。墓石は千手観音坐像で、台石に没年、供養が記されている。その坐像は貫忠（大正二二年没）の墓碑の隣にあり、近代元号が二つ並んでいる。この位置は貫忠没後に貫忠自身が決めた可能性もあろう。ともあれ貫恕は信頼の下に貫忠に寄り添うという関係が推測される。

ちなみに、「日次記」には「一妙房」との名が見える。明治三年一月一九日の記事に「一妙房民政局江松木願書持参」「未時：一妙房高松引取」、六月一〇日「院主：黄昏比帰院、一妙房来ル」などあり、高松の某所から通いで圓珠院に詰め、住職貫忠の代理として手助けをしているが、名前から判断してこれは女性である。「日次記」にはその後も「一妙房大相院江地藏堂ノ移転添書下付願書、宗務庁江持行」（明治一六年一〇月二五日）、「午前分一妙房出町」（明治二二年一〇月二〇日）というように頻出する。貫恕は明治三一年に没するが「一妙房貫恕法師葬儀之控」（棚58-29）と題する史料があり、貫恕≡一妙房であることがわかる。すなわち、ある時期から同居しており、貫忠の事実上の妻であったと推定される。貫恕が得度した時期は、「日次記」を記録するようになった明治一九年頃であろう。

貫忠の住僧環境、経過は以上のようなようであるが、次にその住職時代における地域の民衆・名望家とのつながりについて検討しよう。

【二】名望家・民衆の愛宕社・圓珠院支援

(1) 貫忠入院進物と貫光遷化葬式

①入院進物配り

貫忠が住職となったのは嘉永六年(一八五三)で、その翌年同七年(安政元年)に先代住職貫光がなくなった。ここでは、嘉永六年五月の「貫忠法印入院進物配覚帳」(棚58―28)に記された、進物の送り先を検討することによって、また翌年十一月の「当院十二世真乘院貫光法印遷化一件」(棚58―24)を検討することによって、当時の圓珠院・貫忠の交流の範囲とその特徴を考察する。

まず「貫忠法印入院進物配覚帳」に記された進物の送り先は、大きく分けるとa元西浜御殿大奥関係、b本坊雲蓋院・同末六ヶ坊関係、c紀州・勢州天台寺院、d城下有力神社関係、e紀伊徳川家家臣、f近隣の村方関係、g出入りの商人・職人、h寺社奉行所関係と区分される。また、讓恭院(側室)へ葛一箱、本坊へ金二〇〇疋・紅葉狩(酒の隠語か)五升という進物品は別格で、以外は延紙・風呂敷・扇子・手拭い、及び金・銀(少額)であり、風呂敷は大小の区別、扇子は三本か二本の区別がある。扇子が最も多い。

aに関しては先代貫光時代からの支援・交誼に配慮したものであろう。治宝死去後に西浜御殿は解体されるが、未だ存続している。次にb本坊雲蓋院が重視されるのは当然のことである。従来から天台寺院との交流によりc坂田了法寺、吹上明王院へ延紙三束・扇子三本が贈られているが、さほどの特別扱いではない。ちなみに寺名不詳で

あるが「下寺侍」川村熊七にも扇子二本が贈られている。

d 関係では、近くの神社神主、つまり高松河内守(玉津島社)、安田能登守(東照宮・天満天神社)、矢田主殿(矢宮社)らの名が見える。なお、和歌御宮下男女右衛門(銀五匁・扇子二本)、同人娘(大風呂敷一・扇子二本)という下級職務者への配慮が注目される。

e 有姓の紀伊家家臣と判明するものがかかなり数えられる。記されている順序で列挙すると、嶋田藤馬・塩谷弥左衛門・津村長右衛門・高儀右衛門・久保良右衛門・佐伯三郎兵衛・板橋方右衛門・宇都宮弥惣・林昌謙(奥医師)・本居弥四郎(内遠)・加納兵部というようである。彼等の当時の職名は不詳であるが、記されていないことから職務上の関係ではなく、以前からの私的な交流と見られる。本居弥四郎(内遠)は『紀伊続風土記』編纂に携わった儒学者であり、文化的交流が想定される。板橋以下は扇子五本と特別扱いである。

f の人名が圧倒的多数を占めるが、村ごと整理して検討する。まず帰属村和歌村については庄屋七左衛門のみである(扇子二本)。これに続いて記される永安、表具屋源助は和歌村かも知れない(扇子二本)。ついで関戸村については関戸村地主関加茂四郎(扇子三本)、関戸庄屋勘兵衛(扇子二本)、高松小川万助(扇子三本)、同茶屋五軒(同三本)が記されている。高松茶屋五軒に対して丁重な扱いをしていることがわかる。

圓珠院の山越え東側、和歌川沿いの塩屋村については、塩屋光明寺(黄檗宗)、真成寺(真宗真乘寺)、同村庄屋新兵衛、同村肝煎喜八、同村年番五人組三人(以上扇子三本宛)、同村元次郎、同吉右衛門、同久兵衛、同繁八(以上扇子二本宛)、同村餅投世話人并若者中(諸白(砂糖))、同村民で「出入之筋」同長四郎、同兵藏へは(同二本・銀二匁)、そのほか同八蔵(扇子二本)、同歩行(鳥目一〇〇文)、同非人番(銀二匁)というようであった。なお、塩屋村には藩の煙硝蔵があったが煙硝蔵組頭三人へも扇子二本宛が配られている。

塩屋村の北西に位置する打越村(圓珠院の北東、山越え)については、打越村保田作之右衛門(地士、元大庄屋)に

〈延紙二束〉と別格、同村林蔵・文四郎、同村年行事二人に〈扇子二本〉、塩屋村の和歌川向かい側にある小雑賀村については、小雑賀村庄屋元〈扇子三本〉、同村小山善兵衛、同村茂兵衛、同村善助、同村元右衛門、同村猪之助、大工嘉助、車力梅ノ丞(角力世話人)〈扇子二本〉というようである。

以上のように、村関係では地理的に最も近い塩屋村が圧倒的に多い。圓珠院が塩屋村を含む地域社会(西は高松、東は小雑賀村の範囲)の一員であることを示している。

ついでgについて。八百屋樋右衛門〈大風呂敷一・扇子三本〉、西浜岡本十太郎〈小風呂敷一・扇子二本〉、同村山本善太郎〈扇子三本〉の名が見えるが、圓珠院との個別の出入り関係をもつ西浜御殿雇傭人等が存在した。筆頭である岡本十太郎は圓珠院にとつて先代貫光時代からの要人であることはすでに触れた。それ以上に重要視されているのが八百屋樋右衛門であるが、圓珠院の小回り雑用を勤めている。城下の商人とみられる貝屋源十郎、富吉屋久右衛門、出嶋中楠へは〈扇子三本〉であった。その他、肩書き無しの直道、九八郎、藤之助〈銀八匁・扇子二本〉、幸兵衛〈銀三匁・扇二本〉に破格の進物を行っている。出入りの雇用者であろうか。

京都の商人「いせ利」には別種の物を贈っている〈湯呑一・扇子上一本〉。また江戸上野寛永寺出張中の恵澄(粉河十禅院)、松林院、妙道子へ〈金五〇疋〉、さらに京都の飛鳥井雅久大納言、歌道掛り三人へ〈金五〇疋〉を贈っている。飛鳥井家との関係がすでにあったことが注目される¹⁵⁾。

hについて。当時の寺社奉行垣屋十郎兵衛・菌田彦兵衛へ扇子三本宛、吟味役人四人へ扇子三本宛、両役所同心八人にそれぞれに扇子二本宛であった。上下の格差はあまりなかった。なお、寺社奉行へは三ヶ月遅く八月一四日に贈られた。武家の藩世界、藩の組織をさほど重視していないことが理解される。

以上の分析から、寺院はもとより、武家世界への配慮もあったが、それ以上に寺院が位置する地域社会への配慮を優先していたことが分かる。この点は特徴的である。また、貫忠はこの地域社会にすでに一五年生活しており、

寺院経営にとつて誰との関係が重要かを熟知していた。このような認識が地域を支える人々、寺院社会を末端でささえる下男等への配慮を生んだといえよう。

② 葬式参列者

ついで、「当院十二世真乘院貫光法印遷化一件」(棚58-24)によつて翌年の貫光葬式における圓珠院と関係する人々との交流をみておこう。葬式は嘉永七年(一八五四)一月一日に行われた。当然主役は天台寺院の僧達であるが、弔問者受付や台所方・給仕等「手伝人」として以下の名前が挙がっている(役割は省略)。

山東孫左衛門・木村晴吉・佐伯三郎兵衛・石井猪久之丞・箕島 讓・富上時之助・木村信吉・尾村為三郎・尾村郡左衛門

この内、山東・佐伯・箕島・尾村は紀伊徳川家家臣であることが確認される¹⁶。おそらくその他の人物も家臣であろう。葬式の給仕を手伝うのであるから、ほとんどは下級家臣であろう。「懇意之面々、且隨身之者」に形見が贈られたが、寺院以外は列挙すると、(家臣) 山東孫左衛門、木村晴吉、富上時之助、尾村郡左衛門、尾村為三郎、箕島 讓、高儀右衛門、立石弥太郎、佐伯三郎兵衛、津村長右衛門、天野与七郎、(以下未確認、推測)石井猪久之丞、石井幾之助、田中啓次郎、(その他) 八百屋槌右衛門、真乘寺、保田作之右衛門、藤本宗次郎、岡本十太郎、貝屋源十郎、右同人母、富吉屋源十郎、岩吉、いせや利兵衛(京、いせ利)、というようである。岡本十太郎は軸物一幅、貝屋源十郎は掛もの一幅を貰っている。

その他香奠を持参し、法事に招かれた人名として、家臣は板橋方右衛門、藤本宗次郎、宇都宮勇次郎、松村楠之丞、小川万助、それ以外は塩屋村元次郎、同村又吉、真乘寺(真宗)、小雑賀角力世話人中の名が見える。家臣の内小川は弘化二年(一八四七)段階で「一位様御台所人」であったことが分かる¹⁷。おそらく貫光が西浜御殿との関係を深めた際に知りあった人々と推測されるが、他の家臣も同様な場合が多かつたであろう。

この葬式に際して見られる人名は貫忠住職進物リストの人名と重なる場合が多いが、全体として、貫光との関係を示す葬式関係者は家臣が多く、近隣の人々住居の人々は余り見えない。一方貫忠の進物リストは圧倒的に地域の人々割合が高い。貫光時代の西浜御殿への依存、貫忠の地域社会依存という違いが表現されているように思われる。

(2) 地藏堂再建・書院屋根修復・本堂再建の寄附

明治一七年、住職貫忠は地藏堂を再建した。現在、圓珠院内仏に木造地藏菩薩が二体祀られているが、江戸期『紀伊続風土記』の記載では、初代頼宣と六代宗直が奉納したと伝え、山上愛宕本社の内に安置されていた¹⁸⁾。当院の地藏菩薩信仰は、藩主が地藏尊を寄進したことに始まるが、少なくとも一七世紀末には民衆からの信仰もあった¹⁹⁾。

さて、この地藏堂は現三天堂(明治三二年まで本堂)の南側に建設されたが、「地藏堂再建寄附金控帳」(棚58-30)によると、財源は第2表のように広く寄附された資金一一円余で賄われた。三五件の人々から寄附されたが、一件当たり三〇銭で、それ自身少額である。さら一件の内容を見ると、1は「役場中」、2和歌村「中」、というように比較的に多額の場合も複数者の寄金であり、また14・15・16・19・22・33には誰々「取次」という記載がみられる。これは複数者から集めたものを代表して手渡したということである。また32は人名不詳「魚売女」(おそらく和歌浦居住)は少額であるが浄財三銭を寄附した。比較的高額寄附は3長保寺・35十河武蔵(旧城下商人)であり、4大相院・6高松利助・7岩橋楠松等の日常的交流のある人々はさほど多くない。また29山東武右衛門は元家臣と推測されるが、大きな金額ではない。

地理的な範囲を見ると、和歌村・塩屋村をはじめ、17北田辺町・18御通り丁・34万町・35本町二丁目という旧城下町、鳴神村(城下東方郡部)・井辺村(名草山の東部)という拡がりを見せている。

このように長保寺や名望家・有力商人等から比較的多額の寄附と、極めて少額の寄附が旧城下や周辺村から寄せ

第2表 明治17年地藏堂再建寄附者

番号	人名等	銭
1	和歌村戸長役場中	50
2	和歌村中	159.6
3	長保寺	100
4	大相院	20
5	平畑藤八郎	20
6	高松利助 *1	40
7	岩橋楠松	23.4
8	玉置佐市	10
9	三尾彦右衛門	10
10	同 惣三郎	10
11	酒井長九郎	10
12	米屋久右衛門	5
13	橋本村中	3
14	榎本吉兵衛取次	19
15	久嶋久藏取次	20
16	坂口常吉取次	17
17	北田辺町千原氏	10
18	御通り丁岡本氏	10
19	玉川禎助取次	53
20	玉川禎助	30
21	浜田徳右衛門	10
22	渡辺仁兵衛取次 *2	184
23	鳴神村何五郎	5
24	青井万吉	10
25	神崎氏	10
26	井辺村中	9
27	塩屋村山口源藏	20
28	同人取次	12
29	山東武右衛門	10
30	湯川菊枝 弓場取次	5
31	大工又吉	10
32	魚売女	3
33	簗島氏取次	100
34	万町阿波屋	15
35	本町二丁目十河武藏	85
	合計 *3	1108

*1 手水手拭沢山

*2 別に障子一組

*3 この他に真一心講中 提灯2張

「地藏堂再建寄附金控帳」(棚 58-30)より作成。

られた。記録された三五件に数倍する人々からの寄附によって地藏堂が建設された。明治初期の激動が一段落した段階で、貫忠のかねてからの心願により、ようやく設置が実現したと推測される。

翌々明治一九年には書院屋根修理が大々的に行われたが、この費用は寄附に依らず、掛け軸等の寺宝を売り払い工面した。明治一九年三月一日の「日次記」に「屋根替ニ付兼而所持之ノ掛物売払決定ニ付、岩崎兄弟・谷井勘藏一覽ニ来ル、沼野も同断」、四日「清水平右衛門入来、掛物ト炉縁持帰」、二二日「岩橋楠松入来、掛物持帰」というような記事が見られる。信仰対象のお堂は寄進対象となるが、書院は寄進対象外と理解される。

ついで、一〇数年後の明治三二年には本堂・弁天堂の建て替え計画が実行された。申請願書の「工事費金収支積算書」では支出見積四九九円二五銭(木材費・大工手間等)に対し、総収入高は五〇〇円で、その内訳は「護摩講積

立金」二〇〇円、「信徒中ヨリ寄附金」一〇〇円、「現住職寄附」一〇〇円であった。建物の大きさは、明治二七年段階では元山上にあった愛宕社本社と同じ三間四面を構想していたが（「愛宕山護摩講人名録」前書規約）、明治三二年、実際の計画では二間半×二間とやや小振りとなっている（元本堂の大きさ）。

住職貫忠は明治二七年に本堂再建（移動）の構想を実行に移した。先ず建設資金を確保するために明治二七年一月に「愛宕山護摩講」が実施された。「護摩講人名録」（棚²⁰）によると、この護摩講は岩崎茂兵衛（卜半町）・津田正臣（欠作）・倉田積（西ノ店）・桑山茂平治（安原村桑山）・谷井勘蔵（関戸村）・五斗信吉（北町医師）・清水平右衛門（橋丁）の七人が発起人となり、菊池万蔵（本町三丁目か）・岩根藤十郎（岡北之丁か）・和中範一郎（和歌村）・田中栄松（駕町）・高松利助（和歌村）・岩橋楠松（小松原通七丁目、駿河屋弟）・瀬崎茂兵衛（本町三丁目）・湯川亀次郎（卜半町）の八人が世話人となった。

発起人の内、津田は初代県知事という県政の重鎮であるが、二年後に亡くなり、圓珠院の墓地に葬られるという、当院と深い関係にある人物である。倉田積は著名な漢学者である。また桑山家は江戸期大庄屋を務めた家柄であり、茂平次は県会議員等を経験し、明治一二年地租四四六円持大地主（県下第七位）である。谷関戸村井勘蔵は同年地租二二一円持の大地主で、明治二二年の「貴族院多額納税者議員互選人」である。²¹ 明治二八年発行『帝國名望家大全』（吉野民司編）には津田正臣・和中範一郎の名が載っている。岩崎・清水は旧城下町域和歌山市の有力商人とみられる。いずれも圓珠院に頻繁に出入りしている社会的な地位のある名望家である。世話人の内、和中・高松は和歌浦（当時和歌村）在住で、以外は和歌山市旧城下町の居住である。彼等の多くは圓珠院に出入りする文化人で、資産のある和歌山市・和歌村の名望家である（後述）。

「護摩講人名録」の冒頭に記された「規約」には「日供を合併して月々御膳料三銭」とあり、参加者が負担する護摩料一株とは「日供」合計月三銭（年三六銭）を指すと見られる。本堂（本社）再建五ヶ年計画の財政政策であり、

第3表 明治27年護摩供講参加者(寄附者)

番号	地区の区別	人
I	東部地区(北新・新通り・新中中等)	105
II	城北・城東地区(旧内町・本町・岡)	80
III	城西地区(旧湊町・長町筋・今福)	40
IV	城南地区(小松原・新堀)	18
V	海部郡・名草郡等(和歌村他)	45
VI	他府県(大田市・滋賀県等)	7
所在区分不詳		4
記載なし		89
合計		283

*「護摩講人名録」(棚 53)より作成。

毎年一月に催される護摩講での配札を受ける²³⁾。発起人等は五株から三株が多いが、一年に一円八〇銭、五ヶ年では九円の護摩料となる。三株の場合は一元八〇銭、二株では七二銭、一株三六銭の奉納となる。

一〇株は二人、五株は一人、三株は一人、二株は二人、一株は三四六人、株数合計は五〇〇株である。すなわち、一年に一八〇円が得られ、五ヶ年そのまま継続すれば九〇〇円が見積もられるが、一年分の奉納と見られる(ごく一部、四年、五年の記載がある)。

さらに、「護摩講人名録」からは護摩供料を納めた人々の居住地がわかるので、これを整理すると第3表のようである。Iは城東の旧の新天地(北之新天地他、真田堀・和歌川以東)(和歌山市域)、IIは和歌山城の北・東(真田堀・和歌川以西)の旧内町・岡地域(和歌山市域)、IIIは城西の旧城下町湊地域(南限は今福を含む)(湊地域)、IVは城下南部地域(和歌山市域)、Vは近代和歌村・関戸村・安原村・紀三井寺村等海部郡・名草郡地域(一部、有田郡・日高郡を含む)の一部、VIは大阪市や比叡山(滋賀県)等である。居住地記載のある全体は二九五(件)で、I地区が二〇五人(三六%)最も多く、ついでII地区が八〇人(二七%)と多い。圓珠院の所在地である和歌村等郡部は四五人(一五%)である。

これらの数字から、愛宕社の護摩供参加する人々は旧城下町のほぼ全域に及び、かつ旧城下町(新天地を含む)の他、周辺郡部の人々にも拡がっており、これらの人々の火除け信仰に依存していることがわかる。翌々明治二九年には「今日内町・新町講中参詣、午后院主護摩供修行、講中式百人参集」(同・四・一二)との記事もみられ、護摩供は毎年興行され、二〇〇人規模の人々が

集っていることが分かる。

ところで、圓珠院には「本社葺替万人講」と題する帳(仮綴)が「日供米施入名帳」という題名を付した黒塗木箱に保管されている。²⁴⁾この帳は藩政時代、本社屋根葺き替えに際し、享保七年(一七二二)に日供米施入を募集し、参加した人々の人名を記している。この日供米施入には町方・在方・諸士の区別がなく、身分が入り交じって施入(寄進)額と肩書・人名が記されている。合計二六一筆記されているが、一件は「某取 志」と取り集めた代表者名のみ記されているので、実際の寄進者は数倍に及ぶであろう。身分別に数えてみると、町方一四三件、在方六九件、諸士四六件、寺三軒、泉州谷川瓦業者一名も含まれる。在方の内には「海部郡中志」銀一貫四六〇目という一筆が見られるが、これは海部郡が圓珠院のある郡ということで、同郡大庄屋六人が組織的に集めたものである。多くは数匁から鳥目五〇〇文という程度のももある。合計銀額にして一六貫二七二匁余が集まった。一件平均六二匁余で多額の寄進であった。江戸中期において愛宕社の集金力、城下・在方、さらに諸士方への影響力は相当大きかったことが分かる。

この帳面が大切に保管されているところを見ると、貫忠住職が明治二七年の護摩講はこの江戸中期の日供米施入を参考とした可能性がある。江戸期以来の都市防火の意識、愛宕社信仰の継続が基盤に存在したことが注目される。ただし、江戸期には藩主(この時は着任早々の六代藩主宗直)・寺社奉行所が後にいたが、近代にはそのような存在がなくなった。和歌山市・和歌浦町・関戸村の名望家が呼びかけ人、世話人を勤めることで牽引力となり、株募集が実体化したと見られる。

明治三二年の本堂再建のためには護摩講の他に、寄附金を集めることが予定されていた。明治三二年の「本堂再建募疏」(募金帳(棚41)には寄附者の名前と金額が記されており、合計一〇六人から六〇五円が寄附されたことがわかる。大口では谷井勘蔵・堀田佐右衛門(大阪)が五〇円、和中金助(範二郎)と同一人物か、和歌浦町)・桑山模平

次(茂平次、和歌山市桑山)・堀田左七(大阪)が三〇円、中野文左衛門・木村五郎兵衛(和歌浦町)、津田耕二郎(津田正臣長男)らが二〇円であった。「卜半町中」は江戸期より深い関係にあり、二〇円を寄進している。²⁵⁾「和歌浦町許多人」九円余、「出島浦若干人」三円六七銭、「塩屋村有志者中」三円六〇銭、「匠町有志者中」七円余、「(和歌山市)安原村有志者中」九円余という旧村(大字)有志の募金も含まれている。英国から帰国した南方熊楠も三円を寄附している。

建設資金の不足もあり、明治三三年の別途寄附金は五五人から二五〇円余、同年の護摩供講では一七八人から二一四株(一株一年六〇銭)が集められた。明治三八年には二八五人、三一二株(同前)が集められた。募金や護摩供講の呼びかけ人・世話人は(一部入れ替わりはあるが)おおむね和歌山市と近隣の名望家層であり、募金者・日供施入者は諸階層に及び、地域も和歌山市を中心に郡部にも広く拡がっていた。

なお、明治二七年の護摩供講、同三二年の募金、同三八年の護摩供講の発起人あるいは賛成人と世話人はそれぞれ一五人・二人・一人・一人であるが、岩崎茂兵衛・岩根藤十郎・岩橋楠松・倉田積・桑山茂平次・清水平右衛門・田中栄松・谷井勘藏・和中範一郎(金助)は続けて名を連ねており、中心的な存在で、重要な役割を果たしている。いずれも圓珠院に常に入出入りしている和歌山市・関戸村・和歌村(和歌浦町)の名望家である。三度の募金・講にはこの他大阪の堀田佐右衛門などが協力している。彼等の募金額、講株数は他の一般の人々より多額であることはいうまでもない。

以上のように、江戸期の藩主支援に替わり、明治期になると名望家層の支援が圓珠院の維持継続に不可欠となったことが理解されよう。

【三】幕末・明治初期の地域文化構造

(1) 明治前期の圓珠院訪問者

明治三年から同三二年の「日次記」には、日々圓珠院を訪問した人名と、おおよその来訪時間、辞去時間、もてなし内容等が克明に記されている。以下にその訪問者の特徴を考えてみる。

①旧紀伊徳川家臣

旧藩士かつ文化人で最も著名なのは伊達宗広(藤二郎・千広・自得)であろう。宗広は陸奥宗光の実父で、徳川家藩士、徳川治宝の側近経済官僚であり、かつ国学者・歌人・歴史学者である。例えば「初夜比、伊達自得先生并社中廿人程入来、九半比引取、自得翁・若尾止宿」(明治四・八・一五)、「四つ半比伊達翁引取」(翌一六日)、「伊達隠居、秋葉山亀院江移住ニ付、若尾何程雜具借ニ参候ニ付かス」(同・一一・二七)とあり、弟子と共に夜に来訪し、止宿して、翌日昼頃圓珠院を出たことや、同年、伊達が秋葉山に移り、家具を借りに来るといふ間柄であった。⁽²⁶⁾宗広は暫くして大阪夕陽岡自在庵に移るが、明治五年東京の宗光方に移り、明治一〇年五月一八日に死亡した。「日次記」の同年七月には「谷井惣右衛門来ル、直ニ引取、自得先生を預り有之碧巖録相渡」(二二日)、「今日於秋葉山自得翁追善歌会ニ付、跡を院主出席」(二二日)とある。宗広は和歌山における最後を圓珠院近くですごし、また貫忠の手を経て谷井惣右衛門に遺品書籍が渡された。愛宕山・秋葉山は伊達宗広の紀州最後の縁の地である。

「九半比、伊達五郎殿入来」(明治三・四・一五)という記事があるが、これは伊達宗興のことである。宗広の養子で伊達家跡継ぎ、宗光の義兄にあたる。明治元年に執政となり、明治四年には広島県参事となり移住するが、その間の時期のことである。

旧重臣の水野多門は「水野御隠居四人連れニ而入来、夕方迄遊帰ル」(明治三・三・二三)、「水野隠居入来、并ニ骨董家老人同道也」(同・一〇・一四)と隠居生活の中で圓珠院に出入りした。明治四年八月に死去したが、明治八年七月末に「水野氏碑面建設」が図られ(七・三〇)、「今日水野ノ碑建設ニ付、開筵式相嘗、水野氏家内并旧臣ノ面々参集」(八・一)とある。同二〇年には「早朝木下宗次郎来ル、今日水野故林山居士十七回忌ニ付、当地ニ而祭典致度旨、此程分彼党派一同より申出候付、聞及候処、午前十一時頃迄一同参集にぎく敷相勤め」云々(八・二一)と見える。

政治家として筆頭に上げられるのは津田正臣である。「午時比分津田五位殿入来」(明治三・四・一三)、「七半比和歌津田公御入来」(同四・七・一一)、「巳時比、砂之丸分従五位殿」「遊ニ被参候」(同・八・二四)、「午前津田正臣君来ル」(同一〇・一・一二)「午前十時比、津田五位公入」(同・一〇・九・六)、「今日仲秋望月清光也、午前十一時過津田正臣来ル、止宿」(同二五・一〇・五)と見える。津田は明治四年一月二五月初代和歌山県知事(権令)、「従五位」と称された。明治三年五月から玉津島社地西端(和歌浦町、現和歌山県公館)に別荘を持ったので圓珠院ではこのように呼んだ。²⁸ 権令以前・引退後の記事であるが、正に遊びに来ている。「砂之丸」には新政府下藩の役所があり、勤務後の訪問があった。住職貫忠と親しい関係であるが、多くの場合尊称「公」を付け、また「君」付けの場合もある(貫忠との年齢差によるのかも知れない)。明治二七年には欠作に居住しているが、同二九年に没し、圓珠院境内墓地に埋葬された。

渥美源五郎は一〇代藩主治宝の側近であった渥美源五郎の子であろう。親源五郎は西浜御屋敷御用を勤め、おそらくその当時から圓珠院と親交があり、明治期にはその子が入りしている。「今日和田得度ニ付、…渥美源五郎入来」(明治一七・七・二五)とある。²⁹

明治二〇年代末になると、旧藩士で陸軍少将(後中将)の岡本兵四郎が明治二七年頃(休職中)から出入りし始める。

「院主谷井江岡本少将被參候ニ付出張」(明治二七・五・三三)、「岡本少将入来」(同・六・二二)とあり、さらに明治二九年五月一九日再び休職し、帰国して圓珠院に出入りするようになる。「岡本兵四郎殿帰県ニ付貫恕歡ニ遣ス」(明治二九・五・一〇)、「一時比岡本少将入来、夕方引取」(同・一七日)とある。藩士時代からの出入り、親交があったと見られる。日清戦争に従軍しているが、明治二八年一月には仙台松島から平泉を旅行して紀行文を記し、和歌を詠んで、圓珠院貫忠の下へ送ってきている(圓珠院所蔵)。軍人ではあるが文化人である。

以上、江戸期徳川家関係者の一部が圓珠院と長く親交を保っていたことを確認できる。

②学者・画家・歌人

学者・文化人に関しては、江戸期以来の交流を継承しつつも、明治期の和歌山地域における新しい交流が始まっている。まず倉田績は文政一〇年(一八二七)生まれで、安政五年(一八五七)より城下中之店に居住した。漢学者であるが、歌・禅・能楽にも堪能で、明治六年(一八七三)より和歌山水門神社神官、同二三年から竈山神社神主を勤めた(『紀州郷土芸術家小伝』)。圓珠院へは常に出入りし、貫忠の片腕のような存在であった。例えば「早朝倉田・岡重・弘白展観之拵ニ来」(明治三・四・一三)。また明治三二年本堂再建寄附帳の序文起草を貫忠から依頼されている(明治三一・七・一四)。

古屋管賢は、加納諸平の弟子で、幕末期藩抱えの国学者である。明治初期は日高郡にいたが、明治一七年に和歌山市に移り、歌道を教授した(同前)。「古屋管賢并岡儀兵衛・岩橋楠松入来」(明治二〇・四・一〇)、「吉田南涯・古屋管賢来」(明治二〇・一〇・三二)と見える。市川霞洞は細工町に私塾を開く儒学者で、多くの学生を養成した(同前)。「今日市川霞洞門弟同伴ニ而展観致度旨申来、書院座敷明渡候事」(明治七・四・一二)と見える。

画家では、紀伊徳川家のお抱え絵師であった岩瀬広隆・笹川遊原を始め、岡本緑邨・稻垣南洲・吉田南涯・石本雪溪等が圓珠院に出入りしている。例えば、「岡本緑邨・笹川遊原来ル」(明治三・六・五)、「笹川遊原来来」(明治

六・四・二二)、「夕方稲垣南洲入来、直ニ引取」(明治六・五・一九)、午后：石本雪溪ト云画人も同行」(明治二九・四・二六)、「市川霞洞・吉田南涯同道ニ而来ル」(明治二二・四・六)。

岩瀬広隆は明治一〇年に亡くなるが、明治四年の記事に「岩瀬広隆倅入来」(明治四・七・一一)とある。子息の出入りから広隆自身の出入りを想定できよう。稲垣南洲は「稲垣南洲入来、小襖之画認貫侯事」(同五・八・五)というように書院内小襖の絵を書き、吉田南涯は明治一九年書院修復後、上之間の襖絵を描き、『展覧図録』挿絵も描いている(後述)。

また、西京人沢井石芸、大坂の長坂雲在(元長保寺、和歌浦)等が来訪している。「午前西京人沢井石芸入来」(明治一九・八・一一)、「大坂画工長坂雲在入来」(明治二〇・二・二二)。さらに「南都東大寺僧画修行者来ル、止宿」。「院主同道ニ而画僧和歌行」(明治四・一・一三・一四)というように無名の画僧への対応も見られる。江戸期からの伝統であろう。

歌人では、前田水穂とその社中、志賀武洋(延年九)・松原遊積(有)・野田大次郎・和田九内・養老社中・(西京)北村四郎兵衛の名が見える(歌会については後述)。

(2) 文化活動

次に圓珠院の書院(座敷)において展開した文化活動について見ておこう。

① 書画展観会

例えば明治一三年三月「早朝夕郭始新堀連入来、大相院・明王院来ル、午前十時比三浦始銀行社中入来、煎茶会并に展観会至而盛会ナリ」(明治一三・三・一四)というように茶会・書画展観会が開催されている。この前々日「午後郭百輔・三尾・岡武殿平・楠松、十四日展観ニ付見分ニ来ル、夕方引取、院主所々掃除」(三三・一二)と、準備に

は近隣の知人(郭百輔は今福で開業の医師)が駆けつけている。明治二〇年四月「今朝ヨリ清水平右衛門、今日抹茶席持呉候ニ付、拵ニ来ル、立客凡式百三十人余、当院江も古書画展観二十幅余」(明治二〇・四・二四)とある。協力者を岡東館で慰勞している記事もある(同・四・二八)。このような春の展観会の記録は、「展観見物人群集」(明治三・四・一三)、「今日書画展観会相催候付、諸方ヨリ持参四、五十人入来、」(明治一〇・五・二五)というようである。

また明治二〇年代には秋、重陽の節に開催されている。「今日旧重陽書画展観会興行、八百万・三尾文次郎・楠松・田虎手伝、縦覧人凡百余人」(明治二〇・一〇・二五)、「今日旧曆重九に正当、今日美術画展会ニ付、午前〇川島文峯・岡儀兵衛・同良助・樫井時彦・岩崎楠松・三尾・岡武手伝、貴賤群集、至而盛会、夕方相終」(明治二一・一〇・一三)、「今日展観会ニ付、早朝〆楠松手伝いニ来ル、九時比〆秋山・岩崎・平田・岸等入来、清水・谷井・桑山其外縦覧人多分来ル、大盛会也」(明治二三・一〇・一二)とある。多くの知人が手伝っている。

展観会は祝いや供養としても開催された。書院の修築完成祝いとして「今日普請出来、祝ニ書画展観会相催候事」
「今日展観幅出シ候人数三拾名余、大盛会也、見物人式百人計」(明治一九・一〇・一七)、法事の際にも「明日ハ頼母子并岩崎追善会書画展観会ニ付所々掃除拵等致」(明治一八・四・一五)、「今日岩崎追善会相宮、津田君初岩崎兄弟并諸君五十人計参集」(同・一六)と見える。この他、例えば「根来家内・中嶋米太郎書画并小道具、車ニて持込、見物人夫々参集」(明治二四・六・七)というように展観会が随時開催された。書画展観会は圓珠院だけでなく、和歌山市内の寺院・個人宅等で頻りに開催され、関係者が交流している(次述)。

ちなみに、明治一九年の記念書画展観会には、圓珠院はもとより、島村安兵衛(新通四)・清水平右衛門(橋丁)・吉田南涯(畑屋敷榎丁)・谷井勘藏・津田正臣・沼野六兵衛(橋丁)・岡本善右衛門(駿河町)・桑山茂平次・岩崎茂兵衛(下半町)・川島文峯(郭内京橋畔)・弓場武助(新堀)他から掛軸五一幅が出陳された(「展観図録」棚58-20)。これ

らの人々は「圓山応挙水墨登瀑鯉魚図」や「狩野探幽着色靈猫図」など銘品を所有しており、相互の交流が図られ、その廻りにも同種の関心と作品等を持つ人々がいた。ある規模の文化人ネットワークが存在した。

② 歌会・漢詩会

歌会に関しては次のような記事がある。「午後二時比今前田水穂社中・志賀武伴外二四、五人歌会ニ来ル、」(明治一六・五・二七)、「今日歌連中座敷カリニ来」(明治一九・一一・九)、「午后前田水穂・松原有積・野田大次郎・和田九内等来、右者歌会也」(明治二〇・三・一五)、「今日午后前田連中拾人程寄合ニ付来ル、八名也」(明治二一・五・一五)、「午后、前田水穂初八人程歌会ニ座敷借ニ来ル、則貸」(明治二二・七・二二)、「前田水穂連中入来、歌会」(明治二五・一一・二五)と前田水穂社の歌会が圓珠院書院座敷で頻繁に行われた。「養老社中歌会ニ来ル」(明治二三・一一・八)というように養老社もここを利用した。

また漢詩会も開催された。「午後二時頃詩会連中津田・渡辺・山本・倉田・岩橋・奥村・赤星等入来」(明治二一・五・二)、「二時比、津田父子、山本・水嶋、外二兩人詩会ニ来ル」(明治二三・九・七)。両会に津田正臣が出席しており、倉田績も関係したと見られる。倉田は歌会にも参加しており、明治期和歌山の和漢の文化を支えた。

③ 住職貫忠の書画展・歌会見学

貫忠は、圓珠院で書画展観会を定期的に開催しただけでなく、次の記事のように和歌山市や近辺での展観会をかなりの頻度で見学している。院主は貫忠のことであり、「院主吹上寺江書画展観ニ付見物ニ行」(明治六・二・二二)、「院主新（彌）はり連と同伴ニ而丸之内千種園工珍書画展観会ニ付見物ニ行」(明治九・四・三)、「今日護国院ニテ書画展観会」(明治一〇・六・二)、「倉田・清水同伴ニ而関戸谷井書画一覽ニ行」(明治一九・四・九)、「今日護念寺介石書画展観会ニ付、院主出張」(明治二一・一一・一八)、「今日於報恩寺書画展観会ニ付、院主見物ニ行」(明治二二・四・一四)、「午后院主今日於大立寺展観（念力）絵ニ付出張」(明治二三・一一・一六)、「早朝今院主雲蓋院江書画展

観会ニ付出張」(明治二五・一一・二六)「午后院主谷井氏ト伊勢や佐次兵衛方え書画見ニ行」(明治二七・五・一)、「院主四華館江書画展覧ニ付行」(明治二八・六・二三)と見える。

また貫忠は和歌への関心があり、江戸期より飛鳥井家と交流があった(前述)。「日次記」によると、「午後ヨリ院主出町、今日千種庵ニて双松蔭社中歌会ニ付出頭」(明治九・五・五)「午后院主倉田歌会ニ行」(明治一六・三・一〇)、「院主前田ノ歌会ニ行」(明治一六・三・一〇)「和歌村松原別荘ニ而歌会ニ付同道致」(明治一七・七・六)というように各地の歌会に参加している。また漢詩の会にも参加している。「今日山本詩会ニ付終日同家ニ暮、夜二入院主帰院」(明治二六・一・八)。ちなみに「長保寺・雲蓋院同道紡績初見物ニ行」(明治二三・五・三〇)、「院主、雲蓋院同伴ニ而宇須村中村別荘見物ニ行」(同・九・七)というように、貫忠住職は文化人で、新しい物へも関心が高かった。

④名望家の交流と多様な書院利用

明治三年〜同三二年の「日次記」(欠本あり)に記された、圓珠院訪問者の名前(寺院関係・職人等を除く)を抜きだしてみると、約一八〇人の名前が確認できる。例えば「午后岡山学校先生達五人遊ニ来ル、夕方引取」(明治一八・六・一三)や「女学校教員廿七人遊ニ来ル、夕方引取」(明治二七・四・二二)や「妻」「家内」などの名の記されない人数を入れると約二〇〇人を遙かに超える人が圓珠院に出入りしていた(約二五年間の記録)。これは一〇回出入りした人も一人と数える実数である(延べ人数ではない)。

圓珠院への訪問は、年始礼、「午后頼母子会ニ付、根来・岩崎・三尾・弓場入来、夕方仕舞引取」(明治二〇・一・二・二〇)というように特定の要件で訪れる場合、例えば「桑山父子来ル、夕方谷井勘蔵来ル」(明治二〇・四・一七)と何となく訪問する場合、さらに玉津島社神主の高松房生は明治一六年三月六日「夕方院主婦院、高松房生来ル」、翌日「早朝高松房生来ル、午時頃引取」、さらに同一〇日には「午后院主倉田歌会ニ行、夜十時比高松房生同

道二而帰院、房生止宿」というように、いわば入り浸っている場合もある。

このような多様な訪問がみられるが、岩崎茂兵衛・岩橋楠松・岡武・岡本十太郎・倉田績・桑山茂平次・清水平右衛門・高松房生・高松利助・津田正臣（↓津田耕次郎）・中野文左衛門（関戸村、豪商・紀南山林地主、「帝国名望家」）・沼野六兵衛（江戸期質商、「同前」）・根来義方・和中金助（先代、和歌村）・平畑藤八郎（和歌村、士族、質屋地主）・古屋管賢・三尾文次郎・谷井勘蔵（関戸村、銀行頭取、地主）という人たちは「日次記」に類出する訪問者である。他に、数回名が見える南川十郎左衛門は明治一二年湊中組戸長（直ぐ辞任）であり、弓場武助（新堀五丁目、油商）は明治二二年和歌山市議会の当選者であり、坂上伝吉は明治二二年史参事会員である。前述のように、彼等は和歌山市・和歌村（和歌浦町）・関戸村に居住する名望家である。名前が一度限り登場する名は約七〇人なので、二回以上の来訪者は一〇〇人を超える。明治前期、圓珠院には多数の多様な訪問者があった。

圓珠院では明治一〇年代の境内整備で積極的に桜の植樹を図った。この結果、毎年春には花見客が訪れている。例えば「森部・田中花見ニ来ル、三尾并楠松来ル」（明治二一・四・二）、「今日午后新堀連中妻女子拾四、五人花見ニ被招候事、古屋管賢来ル」（同・同・一一）などに見える。女性も圓珠院境内へ足を運んでいることがわかる。

一方、明治二二年八月・九月の水害に際しては、「早朝分塩屋村人民入込、焚出ニ貸渡候事、夜分は止宿人も有之」（同・九・一二）と書院が利用され、「塩屋議員水害之節ノ礼ニ来ル、金五四持参」（同・一〇・一四）と見える。「木戸照陽家内近隣ノ人拾人計座敷カリニ来ル、則相カス」（明治二九・六・五）というように日常的に書院座敷を提供していた。また、「今日分矢野熊彦ト云仁病氣用状ニ入込、止宿」（明治二九・八・二五）、「夕方分矢野帰宅」（同・同・二六）、「昨夕方分細井三郎病氣用状ニ来ル」（同・同・二五）、「午后細井三郎病氣全快致引取」（同・一・一〇）というように、病人の一時療養所ともなっていた。「夕方、丹波ノ旅僧来、止宿為致候事」（明治二八・七・一）と見え、不時の旅僧への宿提供もあつた。英国から帰国した南方熊楠もこの書院で暫く生活した。³¹

明治期の「日次記」からは、以上のような圓珠院を核とする近代和歌山(和歌山市・和歌浦町・関戸村等)の文化人・名望家の文化交流を知ることができる。圓珠院は地域の文化交流サロンであり、書院は美術館・博物館であった。本堂再建を資金的に支えたのは和歌村・和歌山市の住民(名望家、民衆)であったが、火除け信仰だけでなく、文化交流の側面が重要な役割を果たしたといえよう。

むすびにかえて

以上に述べた本稿の要旨は次の通りである。

- 一、貫忠は幕末期から明治全期におよび圓珠院の住職を勤めたが、圓珠院が従来の徳川系天台寺院という特質を継承し、体現しつつも、少年期から同院で過ごし、地域社会の構成、人的関係を体得し、広く隅々に心配りできる人格を有した。また宗教人であるとともに、書画に対する造詣、和歌・漢詩に対する関心を持つ教養人であった。
- 二、江戸期、圓珠院経営のため、紀伊徳川藩政時代の藩主関係者からの支援だけでなく、火除けという愛宕権現社に由来する普遍的な宗教活動(護摩供講等)や、阿弥陀信仰と関わる地藏菩薩信仰の寺院としても存続し、城下町やその周辺村落という地域社会の民衆の支持をえていた。
- 三、明治初め以降、寺社経営のため数度の護摩供講や寄附金募金活動を行ったが、明治一〇年代半ば〜三〇年代に、和歌山市、関戸村・和歌村等の地主利益等を集積した名望家と都市・農村の(火除け信仰を持つ)広範な民衆とで構成される地域社会が形成され、双方が圓珠院をささえた。
- 四、圓珠院は、上記の名望家の持つ文化的側面のネットワークの核的な位置にあり、地域の文化的なサロン、美術館・博物館的な存在であった。そこには経済的に豊かな名望家に限らず、文化と信仰でつながる広範で多様な人々

が出入りした。南方熊楠の一時居住はそのような圓珠院文化の象徴である。

五、圓珠院と僧貫忠の生き様は地域社会、徳川系天台寺院の近代化の過程を具体的に示している。

注

(1) 古代以来の和歌の浦の北辺はずれに位置する。同時に城下町和歌山を一望できる、城下町の少し南に位置し、愛宕社の火除に注目することが重要であり、和歌浦の北東鬼門という理解は一面的であろう。

(2) 海津一朗「和歌浦・愛宕山の石造物調査―近世和歌山城下町災害史研究事始め―」（『和歌山大学教育学部紀要―人文科学―』第六三集、二〇一三年）。

(3) 和歌山地方史研究会主催シンポジウム（二〇二〇・八・三〇）の成果が『和歌山地方史研究』第八〇号（二〇二〇年十二月）に特集されている。栗原正東「圓珠院の成立と展開―由緒・宗派・本末関係を中心に―」、糸川風太「江戸期の圓珠院―無祿・無旦寺院の運営―」、拙稿「近世―近代、圓珠院境内の景観変遷」など。

(4) 郡部の近代地主である「地方名望家」に関する研究史、「都市名望家」に関する研究史が併存する。本稿では都市とその近郊における地域の、裕福で社会的上層の文化的な階層をさして漠然と用いる。さしあたり山中永之祐『近代市制と都市名望家』（大阪大学出版会、一九九五年）、丑木幸男『地方名望家の成長』（柏書房、二〇〇〇年）をあげておく。最近では、（本稿との接点は薄い）飯塚一幸『明治期の地方制度と名望家』（吉川弘文館、二〇一七年）がある。

(5) 「公儀御代々・当院歴代他代々名前書上」（棚58―24）。本文末に参照資料として境内墓地の大正期以前の墓碑について調査した結果を示し置く。

(6) 拙稿「近世―近代、圓珠院境内の景観変遷」（『和歌山地方史研究』第八〇号、二〇二〇年）。

(7) 本寺にあたる雲蓋院では、一八世紀初め頃、四世憲海・五世宗海・六世亮海が「海」を継承し、末掲圓珠院境内墓碑にある一七世紀末の3廣海もその系統であろう。

(8) 「日次記」明治九年四月の記事のある丁の袋綴じ料紙内に挿入された紙片に「文政十一年三月二十二日生」とある。「日次記」(棚58)は「年中日次雜誌」「日次雜誌」等の総称で、貫忠代に記された圓珠院の日記である。明治三年〜同三二年までが残されている(途中欠年あり)。

(9) 嘉永七年(一八五四)「当院十二世真乘院貫光法印遷化一件」に貫忠二七歳、「戒」一七歳とある(棚58-24)。一方、嘉永六年五月「当院十三世貫忠法印住職一件記」によると、海士郡加茂組小畑村文右衛門六男亀之助、三〇歳、戒一七年と記している。三年のずれ、親名の違いがある。「日次記」の記事に小畑村の人物が頻出するので、こちらが正しいかも知れないが、結論は留保する。

(10) 「日次記」明治八年一月一日の記事。

(11) 天保七年(一八三六)の棟札に「西浜御広敷伊賀役」とある。「伊賀」については「南紀徳川史」(第八冊五三八頁)参照。「貫瑞法印遷化一件」(棚58-43)に「善助ハ御部屋様御附之陸尺二而十太郎仲間」ともみえる。

(12) 貫珠は雲蓋院貫春の弟子であるが、兄真海が先に仏門にあった可能性がある(僧名「海」は雲蓋院の系統を示す)。

(13) 以降、煩瑣なので明治元号にいちいち西暦を付すことはしない。

(14) 老女衆三人に延紙三束宛と比べ、御使番には延紙五束というように、窓口担当者に対する配慮が見える。

(15) 「明日香(飛鳥)井雅久御詠歌」(軸装箱入)(棚38-1)がある。嘉永六年(一八五三)貫忠に寄贈されている。住職になる嘉永六年以前から貫忠は雅久の歌道に入門していたことが推測される。

(16) 和歌山県立文書館編『収蔵資料目録十 紀州家中系譜並に親類書上げ(上)(下)』の該当箇所同名が見える。

(17) 注(16)同前。

(18) 「圓珠院文化財目録」(和歌山県文化遺産課松原瑞枝作成)彫8・彫9、前者は江戸期作、後者は南北朝時代作とされている。

- (19) 現在の圓珠院境内に元禄一年(一六九八)の石造地藏尊があるが、その台座に記された寄進者は一二名で、無姓の城下町人か近隣村民である。前掲注(2)海津一朗論文参照。
- (20) 「護摩講人名録」は美装表紙が付され、木製箱に納められている(棚53)。
- (21) 明治一三年七月刊(明治二二年二月調査)「和歌山県下地租持一覽表」(圓珠院所蔵)による。津田正臣は第四位、五四〇円地租持である。谷井勘右衛門は六〇五円である(谷井勘藏との関係不詳)。
- (22) 高嶋雅明「和歌山県貴族院議員多額納税者議員互選人名簿(1)」(『紀州経済史研究叢書』第二六輯、一九七九)
- (23) 例えば「院主町方護摩講担家江配札、年札二行」(明治二九・一・二四)とある。
- (24) その箱内には、この帳の他に「日供米施入名帳 在方」「同町方」「同諸士」に題した三冊(美装製本)が納められている。この三冊は先の一冊(原本)を整理し、元文三年(一七三八)本殿修覆の日供米施入の記録を加えて清書したものである。
- (25) ト半町へは個別の出入り関係が存続していた。例えば「ト半町火防御祈禱致、午後院主御札・御洗米等持参、御神・酒御鏡等者彼方ヨリ持参也、御初穂金五十銭」(明治一二・五・二二)とある。
- (26) 「亀院」とは山麓にある龜遊岩に因んで名付けられた居宅のことであろうか。
- (27) 慶応三年(一八六七)「伊呂波寄惣姓名帳」(和歌山県立図書館所蔵)によると二五〇〇石、学習館奉行。
- (28) 明治三年五月「取替一札」境内地貸与につき(玉津島社文書106)に「当社境内之内西側蝦蟆之岩^{大根}陽照院下寺際迄之地形、此度御別荘御取建被成候」「右之地形御貸申上候」とある。
- (29) 天保一二年(一八四一)「御影諸頼母子一件控帳」(棚58-37)。親源五郎は白圭との号をもつ画家でもあり、嘉永六年(一八五三)に没(『紀州郷土芸術家小伝』)。
- (30) 『和歌山市議會史 第一卷』(三一〜四八頁)、『和歌山市史 第三卷』(七六〜七九頁)で補った。
- (31) 飯倉照平『南方熊楠』ミネルヴァ書房、一五八頁。一月一九日から居付いた(『南方熊楠日記2』、八坂書房、一七八頁)。

〔参考資料 圓珠院境内墓地墓石一覽〕

二〇二〇年六月～七月調査

〈東側奥〉 南三つ目から

- 1 寛永十七□辰十一月十日 徳西禪定〈門〉
(一石五輪塔)
 - 2 寛永十「」六月十「」妙連〈禪定尼〉
(一石五輪塔)
 - 3 寛永十三年七月十八日 徳順法印靈意
(板碑)
 - 4 元禄四年未「」 正光院 廣海
- 〈東側手前〉 南から
- 5 常樂我淨禪定門 下男平田安吉
 - 6 寛永十七年二月十二日 大法師泉識 靈位
 - 7 万治元年七月 月窓姉秋禪定尼 靈位
 - 8 明治三十一年六月十三日滅 權律師貫恕 行年五十一歳
(千手觀音座像)
 - 9 大正二年四月十八日 一雨院權僧正貫忠塔
 - 10 文久二年三月二日 惠澄大和尚塔 施主法春貫忠造立
 - 11 元禄十二年二月廿四日
(地藏立像)
 - 12 当寺二世顯榮
 - 13 元禄十五年八月十三日 瑞雲寺五世權大僧都法印豪詮 建立逆修一基
 - 14 寛保四年正月朔日 權大僧都法印亮巖
 - 15 安永四年九月十六日 權大僧都法印慧巖
 - 16 文政六年十二月十七日 貫鎮法印塔

17 安政六年三月十日

二藤法印貫仲塔 (北面) 当院九世貫珠末第(弟) / (東面) 十三世貫忠建之

18 文政二年五月十二日

大徳貫淨 (南面) 俗姓寒川弥五太夫二男 / (北面) 当院第十世貫鎮弟子

19 天保七年六月二日

權律師實真塔 (北面) 真也遊学東台病没彼地同胞之芳世情難亡建塔於此

〈北側〉 東から

20 文政十一年正月十日

泰尊大徳

21 昭和十五年四月六日

普照院貫孝和尚塔

〈南側奥〉 西から

22 —————
(岡本) 義務 兄弟墓
(岡本) 重穂

23 積 連乘院・智光院・月光院 (三名並記) (地藏坐像)

24 —————
(東面) 嘉永五子二月十一日 施主岡本氏 / (西面) 安政二卯年二月十一日

先祖代々積 願成院教瑞信士・成証院妙蓮信女・信教院瑞応信士・接引院妙成信士 (四名並記)

25 平成元年八月吉日
(西面) 岡本十太郎

26 寛政三年十二月廿九日
岡本家代々墓

27 —————
暁洲之塔

28 —————
鎮修塔 貫鎮弟子

貫純法印塔 貫鎮法第^(弟)

〈南側手前〉 西から

29 天保六年五月廿八日 権大僧正貫瑞 瑞光寺十一世 (東面) 俗姓藤本伴次郎三男 (二石五輪塔)

30 天明八年十二月四日 真海沙弥塔 (西面) 当院第九世貫珠俗兄 / (東面) 和歌宝蔵院第十世 (二石五輪塔)

31 文化八年二月廿一日

権大僧正貫珠（西面）瑞光寺第九世／（東面）生国佐州相川松永氏二男／

（南面）貫珠法印甥、佐州生静岡県士族和歌山県少属小山周訓、於当地明治廿年二月廿六日病死（一石五

輪塔）

32 寛政四年十一月廿九日

一地院権僧正貫春塔（東面）爪髻塔

33 安政元年十一月八日

権大僧正貫光（東面）生国佐州相川四丁目衣笠氏二男／（西面）瑞光寺十二世

（西側奥 大墳墓）

34 明治二十九年十一月十七日

津田正臣

* 碑文中の「・」は並列記載、「∟」は碑面の区別、「（）」内は形態等を示す。海津一朗「和歌浦・愛宕山の石造物調査」（前掲注②論文）を参照。数年前の道路拡幅工事にとまない、墓地の一部が工事に罹り、墓石は若干移動されている。地下埋没部（へ）記載石碑形態は同氏の説明を一部援用した。

〔謝辞〕

史料を提供いただいた圓珠院住職（兼福蔵院住職）野口貫秀氏、および史料調査にご配慮いただき、同院の寺院情報を提供いただいた圓珠院米田加代氏に心から感謝の意を表します。